

平成 27 年度金沢大学資料館展示活動報告

The Activity Report for Exhibitions held on Kanazawa University Museum in 2015

金沢大学資料館長 奥野正幸

Masayuki OKUNO

1. はじめに

従来、博物館活動は資料収集・保存及びその公開・展示が一般的であった。しかし、近年アーカイブス整備、研究ならびに一般市民向けの講演会をはじめとする様々な取り組みがなされるようになってきた。特に、一般市民の方々を含めた博物館内外での活動も広く行われるようになり、市民に開かれた「地域博物館」(文献1)はその象徴ともいえる。このような、各館の特徴を活かした多様な活動は、今後の博物館の役割についての議論に一石を投じるものである。

多様な博物館活動についての状況は、大学博物館についてもほぼ同様であるが、平成8年の学術審議会の報告(文献2)の中にユニバーシティ・ミュージアムの機能として、(1)学術研究・教育の推移と成果に関する精選された有形学術資料の整理・保存・収蔵、(2)画像データベースを構築して情報提供を行う、(3)学術標本の研究者・学生への公開・展示(学内の研究成果公表)及び地域社会への提供、(4)学術標本を基礎とした、ミュージアム独自の研究の実施、(5)学術標本を用いた学生教育及び学芸員養成教育への協力といった5つの項目が挙げられている。上述の地域博物館等の最近の活動は(3)の機能を発展させたものと言える。しかしながら、個々の大学博物館で上述の5つの機能すべてを充実させることは、簡単ではない。金沢大学資料館では、学術資料の整理・保存・収蔵ならびに公開・展示及びデジタルアーカイブス整備・公開事業を中心としている。

本稿では金沢大学資料館において実施されている活動のなかで中心となっている展示活動等について、平成27年度の報告を行い今後の展開について検討する。

2. 金沢大学資料館の概要

金沢大学資料館(以下、資料館)は、1989年4月1日に設立され、大学が所蔵する学術標本の収集・整理・収蔵及びそれらの公開・展示を主たる目的としている(文献3)。資料館の概要と最近の活動については、有村(2015:文献4)に詳しく述べられているので参照されたい。資料館を他の大学博物館と比較すると、「資料館」の名のとおり旧制第四高等学校を中心とした代表的な7つの前身校に関わる資料を中心に収蔵しており、いわゆる自然史系の学術資料はあまり収蔵していないことが特徴である。さらに、資料館では、ヴァーチャル・ミュージアムの整備事業も重点的に行っている。資料館のモノ資料及び附属図書館の教育掛図等を中心にデジタル・データベースの整備を

行い、web上で資料のデジタル画像や資料情報の一部公開を始めている（文献5）。この他、資料館は、上述の博物館としての様々な機能に加え文書館の機能も有している。

3. 平成27年度の展示活動等とその特徴

前述のように、資料館の事業は多岐にわたり、毎年多数の展示を中心とした事業が実施されている。しかしながら、現在まで資料館事業については、事業ごとの記録はあるものの年度毎に詳細な報告書は作成されていない。そこで、将来すべての事業の報告書の作成をめざし、その試行的な試みとして、資料館の様々な活動の中で中心となる展示活動に絞って、平成27年度の取り組みを紹介する。資料館では、展示スペースが限られていることから、いわゆる常設展示部分と企画展示の部分に分けた展示を行わず、企画展及び特別展を中心に展開し、スペースを調整しながら資料館の重要な収蔵品である加賀藩校の扁額や加賀藩の甲冑ならびに平安時代の仏像などを準常設展示としてできる限り展示に務めている。表1に平成27年度の企画展示活動等をまとめた。この表にあるように、平成27年度は多くの展覧会を開催し、年間入館者数は8,291名に上った。また、平成27年6月には、金沢大学資料館が当番館となり金沢大学を会場として、大学博物館等協議会2015年度大会（第18回）・第10回博物科学会が開催された。本稿では、これらを含めて平成27年度の展示事業等の概要と特徴を報告する。

表1 平成27年度に実施した金沢大学資料館展示・講演事業等

展覧会等名称（会場）	展示概要（資料数）	展示期間（入館者数）
資料館コレクション展2015 資料館再発見。 （資料館）	資料館収蔵物から自然科学・考古学資料を展示。 主な展示資料 ・「前時期動物模型」理学部旧蔵資料 ・第四高等学校旧蔵資料 ・「示景儀」（日時計）、「3Dスコープ（ステレオスコープ）」動物剥製標本、キノコムラージュ標本模型、梅田日記、日本画「富士山」（広田百豊）。 展示資料点数：約100点	平成27年4月8日～9月11日 （4,087名） ミュージアムツアー 平成27年8月10日・11日
資料館展覧会ポスター展「展覧会の記録」 （中央図書館ギャラリーα）	資料館で平成24年4月から27年2月に実施した、特別展、企画展などのポスターを展示。	平成27年6月1日～6月30日
出張展示「学生が贈る、企画展示。植物図館」 （自然科学系図書館）	この展示は、平成26年度後期に資料館展示室にて開催した「学生が贈る、企画展示。植物図館」の規模を縮小し、一部展示品を入れ替えて展示。 主な展示資料 ・寄生顕花植物、植物想像の図すぎな（中央図書館所蔵教育掛図）、牡丹文白磁大壺、チューリップ絵皿（資料館所蔵眺鳥陶磁器コレクション） ・ポタニカル・イラストレーション（植物図）（自然科学系梅林正芳先生作） ・「キノコムラージュ標本模型」資料館収蔵 展示資料点数：7点	平成27年6月2日～7月1日
大学博物館等協議会 2015年度大会・第10回博物科学会 （金沢大学自然科学系図書館棟大会議室・自然科学系図書館AVホール・自然科学本館ファカルティホール・資料館）	大学博物館等協議会 2015年度大会及び第10回博物科学会を金沢大学資料館が当番館となり開催。 主な行事 ・大学博物館等協議会シンポジウム「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの」特別講演、招待講演、パネルディスカッション、大学博物館等協議会総会等 ・博物科学会（口頭発表・ポスター発表） ・金沢大学資料館見学ツアー	平成27年6月25日・26日

平成27年度金沢大学資料館展示活動報告

学生による資料館ポスター展 (中央図書館ギャラリーα)	学生が、金沢大学資料館を一般に紹介するために作成した「資料館紹介ポスター」を展示。	平成27年8月4日～8月28日
資料館特別展 「加賀藩与力 武士のほまれ」 (資料館)	金沢大学埋蔵文化財調査センターの全面的な協力を得て開催。金沢大学宝町キャンパスから出土した江戸時代の加賀藩士の生活に関係する遺物を展示。 主な展示物 ・中国陶磁器（17世紀から18世紀） ・有田焼染付芙蓉手皿（17世紀後半） ・鍋島焼染付幾何文皿（18世紀後半） ・茶道具（18世紀から19世紀） ・春日山窯製品（19世紀初頭） ・経王寺旧境内出土越前焼き甕棺（18世紀後半） 展示資料点数：約250点	平成27年10月1日～ 11月11日 (1,563名)
資料館特別展示 「東洋史学の泰斗・岡崎文夫とその交友－岡崎文夫宛書簡展－」 (資料館)	展示資料 富山県出身の東洋史学者 岡崎文夫博士の交友関係を示す書簡。 展示資料点数：約22点	平成27年10月1日～ 11月11日
写真展「よみがえる城内キャンパス」 (金沢城公園鶴の丸休憩所)	金沢大学のメインキャンパスが、金沢城跡にあった時代のキャンパス、建物及び学生たちの姿を捉えた写真を展示 展示資料点数：約17点（写真パネル）	平成27年10月27日～ 11月5日
美術教育専任教員×学生×OB作品展 「i-ACANTHUS ARTS 2015」 (資料館)	金沢大学美術教育専任教員、学生、及びOBが作成した、絵画、彫刻、デザインなどを展示した美術展	平成27年11月17日～ 11月27日
「破かれた恋愛小説 ～『寒潮』に翻弄された四高生～」 博物館実習学生企画による展示 (資料館)	博物館実習学生の企画による展覧会。明治41年に連載された菊池幽芳の小説『寒潮』をめぐる四高生の意識と行動に関する資料を展示。 主な展示資料 ・明治の四高生（写真パネル） ・『南下軍』関連資料 ・『寒潮』連載紙面（複製） ・四高及び周辺地図 ・『南下軍の歌』レコード ・四高剣道部メダル 展示資料点数：約20点	平成27年12月9日～ 平成28年2月10日 (1,227名)
企画展 「ドイツ統一への道」パネル展 (資料館)	金沢大学資料館・金沢大学国際機構及び石川日独協会が大阪・神戸ドイツ連邦総領事館とともに主催した、ドイツ外務省による巡回パネル展示。 ・ドイツ統一前後の様子を紹介するパネル展示。 展示資料点数：20点（パネル）	平成28年2月17日～3月2日 (513名)
企画展「ドイツ統一への道」特別講演会 (金沢大学附属中央図書館AV室)	講演題目「統一ドイツのヨーロッパにおける役割」 講師：インゴ・カールステン在日ドイツ総領事	平成28年2月18日 (72名)
常設展、他		(901名)

3-1 コレクション展2015: 資料館再発見。(会場：資料館展示室)

まず、平成27年度はじめの4月8日から9月11日にかけて、「コレクション展 2015：資料館再発見。」を開催した。この展覧会では、これまで資料館で収蔵してきた学術資料をコレクションごとに展示した。具体的には、①前身校の紹介とともに大学史を振り返る古写真を含めたパネルを中心とした展示、②本展示の中心となる資料館収蔵品コレクション（第四高等学校物理実験機器、梅田家資料、埋蔵文化財調査センター資料、理学部旧蔵「前世紀動物模型」ならびにキノコムラージュ標本等）の展示、及び③ヴァーチャル・ミュージアム関連展示を行った。平成26年度までは、新入生を主な対象とした「新歓展」として前身校関連のモノ資料、写真、公文書を中心とした展示を

行っていたが、平成27年度からは資料館収蔵品コレクションから毎年テーマを絞り資料を選択し、展覧会を開催することで新入生のみならず多くの学生・職員ならびに一般の方々に見ていただくことを目指した。

今回の展示では、およそ100年前に島津製作所で製造され、第四高等学校で使用されていたテラコッタ（素焼き）の恐竜やマンモス等の「前世紀動物模型」ならびに加賀藩の測量士・遠藤高璟（えんどうたかのり）が作成し、日本に数台しか現存しない江戸時代の日時計（至景儀）などが多くの来館者の注目を集めた。（写真1）



写真1 コレクション展の様子

3-2 特別展「加賀藩与力 武士のほまれ」－金沢大学の発掘展－（資料館展示室）

資料館特別展は、企画展示とは異なり、テーマに応じて資料館の収蔵品だけでなく、金沢大学の他部局や学外の機関等から借用した資料も用いて、金沢大学に関係するより幅広い展示を行う。

平成27年度の特別展「加賀藩与力 武士のほまれ」は、金沢大学埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）の全面的な協力を得て、開催が実現された。埋文センターの主要な事業は学内で発見された遺跡において考古学的な発掘調査を行い、その出土遺物の整理と報告書を作成することなどである。今回の特別展では、埋文センターが現在金沢大学附属病院・医学類（旧医学部医学科）及び保健学類（旧医学部保健学科）がある、宝町キャンパス及び鶴間キャンパスで行ってきた江戸時代の宝町遺跡と鶴間遺跡の調査で出土した遺物を中心に展示が行われた。宝町遺跡の与力町及び鶴間遺跡の下屋敷に住んでいた人々の生活が、漆碗や茶道具など加賀の文化を継承する豊かなものであったことが再確認されている。これらの遺物とともに、再興九谷の製品、有田焼及び鍋島焼の皿などが展示された。その他、金沢大学角間キャンパスの角間遺跡から出土した、縄文中期の資料や古代の山間寺院関係資料も展示された（写真2）。

この特別展は、学外からの問い合わせも多く、また埋文センター教員の講演を交えた見学会も開催し、期間中に1,536人の来館者があり好評であった。詳しい展示内容については金沢大学学術情報リポジトリKURAのウェブサイト（文献6）で公開されている図録を参照されたい。

今回の特別展は、前述のように埋文センターとの共催という形で実現した。今後の特別展等でも積極的に他部局及び学外の機関の協力を得て、共同開催の形で展示会を実施することで、資料館の展示活動を効率的に活性化することが期待できる。



写真2 特別展の様子

3-3 出張展示「学生が贈る、企画展示。植物図館」（金沢大学自然科学系図書館）

この出張展示は、平成26年度後期に資料館展示室で開催した、「学生が贈る企画展示。植物図館」

の規模を縮小して、自然科学系図書館で開催された。この展示は、展示アーカイブ及び博物館学系授業との連携活動を、自然科学系の学生・教職員に周知することを目的とするとともに、この展示開催期間中に「大学博物館協議会 in 金沢大会」が金沢大学自然科学系図書館棟で開催されたことから他大学の博物館関係者に資料館の活動を紹介する機会ともなった。展示の内容は表1にも記載したが、植物に関係する資料館収蔵資料の他、金沢大学理工研究域の教員が描いた植物図も含まれる。この出張展示を通して、広い金沢大学のキャンパスの中で、資料館の活動をより多くの関係者に周知することができた。このような出張展示は、他の大学博物館では既に実施されているが（文献7）、今後の資料館の活動が金沢大学の枠を超えて外部で開催することが重要であることを示すものといえる。

3-4 資料館展覧会ポスター展「展覧会の記録」（中央図書館ギャラリーα）

本展示は、平成24年4月から平成27年2月までの3年間に資料館が行った展示歴を、ポスターで紹介したものである。これまでの資料館の展覧会ポスターと特別展の図録を展示することにより、資料館の様々な展示活動の一端を一挙に紹介し、その結果、資料館の様々な展示活動を主に学内関係者に周知し資料館の存在を示すことができた。このように、展覧会のポスターを資料館の展示活動の成果や資料としてとらえ、利用する試みは有効であると考ええる。

3-5 資料館特別展示「東洋史学の泰斗・岡崎文夫とその交友—岡崎文夫宛書簡展—」（資料館展示室）

岡崎文夫（1888～1950）博士は、富山県出身の東洋史学者であり、金沢大学の前身校の一つである旧制第四高等学校を卒業後、京都帝国大学文学部史学科に進学し、内藤湖南に師事した。1924年に東北大学法文学部の助教授となり、その後教授に昇任して1948年に退官した。岡崎博士は、魏晉南北朝史のパイオニアとして知られている。

その岡崎博士の交友関係を示す岡崎博士宛の書簡約70通が、2013年に岡崎家で発見された。岡崎博士の親族の了解を得て、岡崎博士が青春の一時期を過ごした金沢で初めての展覧会が資料館で開催された。今回の展示は、当時の著名な中国文学、中国哲学、東洋史学者からの書簡に加えて、内藤湖南自筆の扁額も展示された。この展示は、岡崎家の関係者と親交のあった前資料館長にこれらの書簡の整理が委ねられたことを契機として実現した。本展示は、特別展及び常設展示と並行して開催されたが、資料館としてはうまくアレンジできたと考えている。

3-6 写真展「よみがえる城内キャンパス」（金沢城公園内鶴の丸休憩所）

本写真展は、金沢大学のメインキャンパスが、金沢城内に置かれていた時代の写真を展示する企画である。金沢大学のホームカミングデーに合わせて平成21年度から毎年開催し、金沢大学卒業生には当時の様子を振り返っていただき、一般の方々には当時、世界でも非常に珍しかったお城の中の大学の雰囲気と当時の世相を知っていただくことを目的とした資料館としては、特別な意味を持つ展覧会である。

3-7 企画展「i-ACANTHUS ARTS 2015」美術教育専修教員×学生×OB作品展（資料館展示室）

本展覧会は、平成13年度より毎年開催されている。当初は金沢市民芸術村で開催されていたが、現在は資料館展示室において開催している。美術教育専修の教員、学生及び卒業生による美術展であり、絵画、デザイン、工芸など多岐にわたる作品を展示した。このような学内の活動や研究の成

果を展示することも、資料館の重要な展示事業であり今後、科学分野の研究の展示などに拡大していきたい。

3-8 博物館実習生による企画展「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生～」(資料館展示室)

本企画展は、学芸員養成課程の最終段階に位置づけられる博物館実習のまとめとして平成26年度から開催されている。そのため、学芸員資格の取得を目指す学生が、教員や学芸員の指導を受けながらも、テーマ設定や展示内容を一から考えて構想されたものである。今回の展示は、明治末期に、ある新聞に連載された恋愛小説「寒潮」にまつわる、当時の四校生が関与した通称「寒潮事件」を題材としている。この小説は、四高の男子生徒と北陸女塾の女学生の恋愛を描いたもので、金沢でも人気を博したと言われている。しかし、四高生をモデルとして、軟派な男子生徒が描かれたことで学内の意識改革を叫ぶ四高生が問題視し、ついに連載が中止された。展示では、「寒潮」のストーリー解説をパネルの他、iPadを用いて紹介するとともに、「寒潮事件」から読み取れる当時の四高生の気風を八高への挑戦状や南下軍の歌などで示している。館内に小説の挿絵を模した顔出しパネルを設置したり、見学者からの恋愛にまつわるエピソードを、匿名性を保って公開するなどレベルの高い展示であった。1,227名もの多くの来館者数が、この展示の人気を裏付けている。



写真3 学生企画展の準備

3-9 企画展 「ドイツ統一への道」パネル展 (資料館展示室)

平成27年(2015年)は、ドイツが再統一されてから25年目にあたり、ドイツ外務省が中心となりパネル巡回展示が実施され、資料館においても展覧会を実施した。展示パネルは、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館が制作したものを借用した。東ドイツにおける平和革命により、ドイツ再統一が実現した経緯を、20点のパネルで解説した。また、会期中に大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事のインゴ・カールステン博士(Dr. Ingo Karsten)による特別講演会「統一ドイツのヨーロッパにおける役割」を開催し、72名もの参加者があった。本展示会は、資料館がドイツ外務省からの提案による巡回展に応じたものである。このように、状況に応じて迅速に臨時の展示会を決定・開催できることは資料館の大きな強みといえる。

3-10 大学博物館等協議会2015年度大会・第10回博物科学会(文献5、8、9)

最後に展覧会ではないが、資料館が当番館となり金沢大学において開催した「大学博物館等協議会2015年度大会及び第10回博物科学会」について報告する(文献8)。大学博物館等協議会は大学に設置された博物館等が中心になり、博物館活動に関する情報を共有し、大学博物館等の発展のために協議して問題解決を行う団体である。また、協議会の開催に合わせ2006年度から「博物科学会」が開催されている。今大会には全国から26館の大学博物館等の参加があり、出席者数は約110名を数えた。

1日目の大学博物館等協議会では、シンポジウム・パネルディスカッション及び館長会議・実務

者会議・協議会総会ならびに博物科学会総会が開催された。協議会シンポジウムは「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの」と題して大会実行委員長の趣旨説明の後、古畑徹金沢大学図書館長から「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの～金沢大学を例として～」と題して、金沢大学でのヴァーチャル・ミュージアムの現状と問題点などについての特別講演があった。続いて、安達毅秋田大学教授による「秋田大学における資源学教育の一例として～バーチャル鉱山実習システムの開発と活用」、岡室美奈子早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長による「演劇博物館デジタル・アーカイブの現状と課題」の2つの招待講演があった。講演終了後に行われたパネルディスカッションでは、ヴァーチャル・ミュージアムの様々な問題点について活発な意見交換が行われた。また、実務者会議でも例年にない活発な協議が行われた。

2日目は、博物科学会の研究発表（口頭発表15件、ポスターセッション15件）が行われた。博物科学会終了後、金沢大学資料館のガイドツアーを実施した。

なお、シンポジウムの内容は、金沢大学資料館紀要11号に掲載されている（文献9）。

4. まとめと今後の活動について

最後に平成27年度の資料館展示活動を振り返り、今後の方向性について検討した。

4-1 平成27年度資料館展示のまとめ

平成27年度、資料館は小さな展示を含めて10件の展示活動を行い、入館者は8,291名を数えた。そのような平成27年度の展示活動について振り返ってみる。

従来の資料館の展示活動は、4月に始まる「新歓展」、秋に開催する「特別展」及びこれらをつなぐ常設展や小さな企画展で構成されていた。この構成は26年度まで続けられたが、より多様な入館者を意識し、「新歓展」ではなく、資料館が収蔵するコレクションをテーマに沿って展示する「コレクション展」を開催することとした。これによって、資料館の収蔵資料から今まで展示されてこなかった収蔵品が登場するきっかけとなり、これまで文系資料の展示が多かったなか、コレクション展では「前世紀動物模型」（理学部旧蔵）を展示した。更なる工夫は必要であるが、コレクション展を今後の年間展示活動のメインとしていきたい。

もう一つの新しい試みは、従来、資料館と資料館以外の学内のグループ等の2つであった展示主体に学内の他部局との共催の形態を加えたことである。この考えのもとで、埋蔵文化財調査センターとの共催の形で「特別展：加賀藩与力 武士のほまれ」を開催した。このような展示形態は、今後も意識して展開したい。（注：この展示の流れは、平成28年12月開催の石川県立自然史資料館との共催展示につながった。）

また、平成26年度に開催した博物館実習を受講する学生による企画展を平成27年度も開催した。この企画展示は、経験はあまりないものの斬新なアイデアを持つ学生が、テーマ設定や展示内容を一から構想したものである。これにより、平成27年度の展示「破かれた恋愛小説」では、学生が持つ潜在的な展示企画の能力を余すことなく発揮した、非常にユニークな展示となり、大盛況となった。

さらに、展示活動ではないが、「大学博物館等協議会」を開催したことも、27年度の重要な活動である。協議会の開催を契機に、資料館活動についての視野が大きく広がったと確信している。

以上のように、平成27年度は資料館の展示活動にとって一つの転換点になった。今後、これらの

取組について、改善を加えながら継続して実施していきたいと考えている。ただし、このような様々な展示を実施につなげるために、学芸員1名に大きな負担をかけていることも忘れてはならないことである。資料館にとって、学芸員等の人的資源の確保が大きな課題である。

4-2 今後の資料館展示活動の在り方について

今まで、平成27年度の資料館展示活動の概要とその特徴や問題点をとりあげてきたが、ここで今後の資料館の展示活動の在り方について考察してみる。資料館では、上述のような展示機能の他に、法人文書の保管など「文書館」の機能を併せ持っているが、依然として展示活動がその活動の主体であることは変わらない。しかしながら、他の大学博物館では、従来の展示活動の枠を超えた様々な取組みが行われている。その中で、金沢大学資料館が博物館として、重点的に取組むべき活動はヴァーチャル・ミュージアムと地域博物館だと考える。ヴァーチャル・ミュージアムを含めて、資料館の持つ資料や情報を日本だけでなくグローバルに発信しつづける取組みは今後の重要活動の一つである。これによって資料館の持つ資料や情報が何倍にも活用されるものと確信する。反面、ヴァーチャル・ミュージアムにはまだ解決されていない大きな課題が残されている。著作権と個人情報である。二つともデリケートな部分もあり、ヴァーチャル・ミュージアムを展開するためにはいつも意識していなければならない問題であり、資料館単独でなく他の博物館と協力しながら歩調を合わせて乗り越える必要がある。地域博物館については、資料館としては教育を組み込んだ展示活動があるが、今後は、一般の人々を含めた活動に取り組む必要がある。それによって、資料館が金沢の人々を含めた一般市民参加型の地域博物館の代表の一つとなることができると考える。ただし、博物館の活動には何か特定のものを目指さなければいけないということはなく、個々の博物館がよく考え、その独自性を打ち出すことが重要である。資料館でいえば、日本には理系の資料や標本（恐竜化石などがその代表であろう）や考古学資料（遺物）を展示の中心にした大学博物館が多い。その中で、金沢大学資料館では、多くの歴史的な文書資料を収蔵していることから、これを利用した展示や大学内外での活動が重要であり、大きな特徴になることは間違いない。

以上、あり方を考えるとして、いろいろと論じてきたが、現実的な問題として資金と人的資源の確保が必要である。資金に関しては、国立大学の法人化後、確約された資金は殆どなくなり、今は外部資金を確保しなければ運営に支障が出かねない状況である。国家が財政の危機にある状況では、外部資金も潤沢にあるとは考えにくい。また、博物館など長期的な視野に立って文化に貢献する分野より、短期的に効果が確認できる科学技術へ資金が流れていることも現実である。そんな中で、資料館としては、資金の確保に努めながら、効率の高い運営をしていくことが必要であろう。ただし、そのためにはある程度の人員が必要である。この議論は、循環してしまうことになり、今後も検討が必要である。そのためにも、このような報告として、資料館が行った事業の記録と反省を残していくことが重要であると考えられる。

参考文献

1. 「市民のなかの博物館」伊藤寿郎，吉川弘文館，1993年
2. 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）－学術標本の収集，保存・活用の在り方について－」，1996年<http://protist.i.hosei.ac.jp/science_internet/gakushin/UnivMuseum.html>（2017年2月2日アクセス）
3. 金沢大学資料館「金沢大学資料館概要」『金沢大学資料館だより』21，2-6，2003年

4. 有村誠, 「金沢大学資料館の学芸員養成プログラムにおける取り組み ―大学博物館の原風景―」, 金沢大学資料館紀要, 10, 27-36, 2015年
5. 古畑徹, 「特別講演『ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの～金沢大学を例として～』」, 金沢大学資料館紀要, 11, 74-84, 2016年
6. 平成27年度金沢大学資料館特別展「加賀藩与力 武士のほまれ」図録 2016年10月 <<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/43440>> (2017年2月2日アクセス)
7. 生田享子, 「資料公開の可能性: 展示協力と出張展示 二つの試み」, 学習院大学史料館紀要, 16, 131-140, 2010年
8. 奥野正幸, 「大学博物館等協議会2015年度大会・第10回博物科学会開催報告」, 大学博物館等協議会ニューズレター, 18, 1-2, 2016年
9. 大学博物館等協議会シンポジウム「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの」, 金沢大学資料館紀要, 11, 71-113, 2016年